
ミラクル ダイヤモンド

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラクル ダイヤモンド

【Nコード】

N8335W

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

己の願いを叶える為に戦う戦士、ジュエラー。

倉四季キラは二宮テルと出会い、戦いの中へ身を投じる。

人を守りたい。ただその為に戦うキラ。

願いを叶える。その為に互いを潰し合うジュエラー達。

最後に生き残るのは

そして、願いを叶えるのは……？

プロローグ：silentナイト

日本の、静かな夜。

一人の女性が仕事を終えて家路についていた。
女性の足音のみが周囲に響き、コツン、コツンと規則正しく音がなる。

静かで、何一つ騒音が無い夜だった。

ある時、女性は何者かの視線を感じて立ち止まり、振り返った。
しかし、どこにも誰もいない。

気のせいかと思い、歩き出す。

しかし、やはり何者かの視線を感じる。

再び振り返る。

だが、誰もいない。

不審に思いながらも、女性は家へと帰ろうとする。

その時、女性の肩を何かが掴んだ。

女性がそれを認知する前に、その体はどこかへ引き込まれてしまった。

後には宝石などの鉱石で出来た穴が残った。キラキラと輝くその穴は暫くすると消えてしまい、後には何もなくなった。

何もなくなった場所に、虚しく風が吹き荒れた。

1話：スタートライン

時刻は5時を過ぎ、下校を始める生徒が現れ始めた。

ここ花山第三中学校は首都東京から離れた瀬戸内海に接した田舎町にあるごく普通の公立学校である。

田舎といっても、首都とレベルが違うだけで電車もコンビニもテーマパークもある立派で活気の溢れる町だ。

一人の中学生が学校の門を歩いて通り過ぎ、家路につく。

少女の名前は倉四季くらしきキラ。

白い髪のはきは薄く赤い髪がグラデーションで彩り、短い髪が揺れて首を擽る。

どこにでもいる普通の女の子で、今日も授業が終わって少し勉強を
して帰る所だ。

母は専業主婦で父親は役所に勤める公務員。

兄も妹もない一人っ子で、至って普通の家庭で育ってきた。時々
普通過ぎて地味かな、と思いはしても現状には何も不満はなかった。

商店街は夕飯の材料を買いに来た主婦や散歩をする高齢者で賑わっ
ていた。

商店街というものがいつまで残ることになるのか分からないが、キラはこのいつもの風景が好きだった。

「キラちゃん、この飴どうぞー!」

饅頭屋のおばちゃんがキラに飴を差し出す。

キラは両手でその飴を受け取り、お礼を言う。

「おばさん、ありがとう」

キラは歩きながら飴の袋を開け、口に放り込む。

莓味の甘味が口中に染み込む。

「甘いなあ」

甘いものは嫌いではないので思わず顔がにやけてしまう。

飴を食べ終え、キラはてくてくと歩いていく。

その最中、ふと商店街で見たテレビのニュースを思い出した。

最近頻発している失踪事件がまた起こったのだと言う。

噂ではテレビで挙げられている量の二倍以上の被害が出ているとか。

怖いなあ、と思いつながら歩いていると、突然前方から悲鳴が聞こえ

た。

目線を足元から前方に移すと、視界にスーツケースがボトンと落ちたのが入った。

そのすぐ横に宝石で出来た穴があった。

陽の光ではなく、自身で発光しているようだ。
綺麗と言えばそうだが、どこか妖しい空気を漂わせていた。

「・・・逃げた方が良いよね」

キラは身の危険を感じ、その場から逃げようとした。

しかし、あのスーツケースの持ち主の安否が気になった。
もしかしたら自分が行けば助かるかもしれない。

そう思い、キラはスーツケースの元まで走って来た。

そして、宝石で彩られた穴を見る。

よくみると周りの縁に宝石や鉱石が生えているだけで、中心はグラグラと揺れている怪しげな空間になっている。

しかし、その先にある景色は何の変哲もないものだった。

よくみると穴に隔てられた向こう側の景色だ。

キラは少し躊躇ったが、意を決して穴に飛び込んだ。

何とも言えぬ感触が全身を包み込む。
そして、まばゆい光がキラの視界を塞ぐ。

キラは気が付くと穴をくぐり抜けていた。

辺りを見渡すと、そこは穴をくぐる前と大して変わらない場所だった。

そして、穴は消えて無くなってしまった。

「人はいないのかな・・・」

キラはいなくなった人物はいないか探しはじめる。

そこで、初めてこの場の奇妙な点に気付いた。

遠くにあるビルや建物から巨大な宝石が生えていた。

そして、近くの川や足元の芝生からもまちまちなサイズの宝石が生えてくる。

キラは気味が悪くなり、スーツケースの持ち主はいないか探し出す。

そして、倒れている男を見つけると、傍に駆け寄って助け起こす。

「大丈夫ですか？」

「うううう・・・」

男は苦しそうに呻いている。

ここに来たシヨックで気を失ったのだろうか。

その時、キラの目の前に何者かが現れた。

それは、蜘蛛の姿をした人型の怪物だった。

「なっ!?!」

キラは急いで男を掲げ、引っ張って逃げようとする。

次の瞬間、キラは顔を殴られて横に吹っ飛んだ。

見ると、新たなモンスターが立っていた。

先程と同じ蜘蛛の怪物だった。

ただ、さっきの蜘蛛は緑色だったのに対し、こいつは赤い体だった。

二匹のモンスターは倒れた男にかぶりついた。

「つつつつ!?!つあやつ!?!?!」

男は声にならない悲鳴をあげ、悶え苦しむ。

そんなことはお構いなしにモンスターは食事を進める。

肉のちぎれる音。

それを噛みちぎる音。

飲み込んで喉を通る音。

ムシャムシャと音を立て、二匹のモンスターは食事を続ける。

その場からドロドロと血が流れ出し、男の声も途絶えた。

キラはただ呆然とその景色を眺めていた。

食事を終えた蜘蛛のモンスターは次なる矛先をキラに向ける。

キラは逃げようとするも、足が震えて動けない。

ただ食われるその瞬間を待つ。

その瞬間、二匹のモンスターが吹き飛んだ。

キラは思わず腕で頭を庇う。

やがて煙が晴れ、キラは恐る恐る目を開けた。

そこには一人の少女がいた。

長い藍色の髪を靡かせ、揺らがぬ眼差しでモンスターを見続ける。

右手には細身の剣を持ち、紫色の宝石で出来た鎧を纏っていた。

アメジストで出来たその鎧は鋭い輝きを持ち、近寄り難い雰囲気により一層強めていた。

少女は横目でキラの姿をチラッと見ると、すぐにモンスターに視線を戻す。

「・・・まだ生きてたの」

「大丈夫か？」

少女の冷たい声と違い、暖かい宥める様な声が背後から聞こえてきた。

振り返ると、そこには一人の女性がいた。

赤いショートカットに赤い鎧。

少女を紫と例えるなら、女性はまさに赤だった。

その両手には赤い宝石がついたナックルが装備されており、少女の剣に当たる武器がこのナックルなのだろう。

「あの、貴女達は・・・」

「彼女達はジュエラー」

キラが女性にこの状況は何なのか尋ねようとした瞬間、何者かが答えた。

キラが声のした方向を向くと、そこには二つの光る小さな球体があった。

黒と白の二つの球体には顔のパーツがついていた。

白い球体は無表情で、あまり興味なさげな顔をしており、黒い球体はニヤニヤとこちらを挑発するような顔をしていた。

そして、二つの球体はキラに話し掛けた。

「・・・もし、君が望むなら、」

「ジュエラーにならねえか？叶いたい願いがあるならなあ？」

黒い球体はニタニタ笑いながらキラに持ち掛けた。

キラはこの不可思議な状況に戸惑い、何も言えなかった。

1話：スタートライン（後書き）

いよいよミラクル ダイヤモンドが始まりました。
精一杯頑張ります。

倉四季キラ CV・植田佳奈

2話・契約、ダイヤモンド

「さあ、叶えたい願いを言いなあ？何でも願いが叶うぜえー？」

黒い球体はキラに詰め寄った。

キラはどうしたらいいのか分からずにうろたえる。

赤い髪の女性がキラと黒い球体の間に割って入る。

「おい」

「何だあ、邪魔すんなよお」

黒い球体は女性に突っ掛かるが、白い球体がそれを止める。

「僕も賛同しかねるね。せめて情報は正確に伝えるべきだ」

「ちっ」

黒い球体は舌打ちし、キラに向き直る。

「まあいいか、どうせ何しようが同じだろうしなあ？」

キラは黒い球体の言いたい事が分からずに戸惑う。

赤い髪の女性は球体を手で追い払い、キラに向き合った。

「すまないな。戸惑わせてしまっただろう」

「いえ・・・あの、貴女達は一体・・・」

キラは女性にその正体を尋ねた。

女性はどうしようが迷ったが、キラに正体を明かした。

「私の名は一長アキラ、この姿はガーネットという・・・そして、あいつは二宮テル。あの姿は・・・アメジスト」

少女・・・テルはモンスターの攻撃をかわしながら剣で切り付けていく。

少女が動く度に髪はたなびき、キラキラと輝いているようだ。

少女はモンスターを蹴って跳び上がり、空中で宙返りしながら着地する。

少女は腹にあるケースからカードを引き抜く。

そしてそのカードを剣の柄に差し込む。

差し込むと同時に柄にある小さな翼が広がる。

《イリュージョンキラ》

剣から電子音声になったかと思うと、テルが三人に分身した。

キラはあまりの事態に驚く。

分身したテルは蜘蛛のモンスターを切り刻み、モンスターは抵抗出
来ずに吹っ飛ばされる。

すると、二匹の内の一体は逃走を始めた。

しかし、一体は取り残される。

テルは構わずまたカードを抜いて差し込んだ。

《ファイナルキラ》

空の空間が裂け、そこから全身がアメジストで出来た鳥が現れた。

テルは剣を上に掲げ、回転させる。

テルの周りから紫色のエネルギーが剣に集まり、テルを中心に強力
な竜巻が出来る。

テルは剣をしつかと握ると、後ろに剣を引く。

アメジストの鳥・・・バードアメジストは巨大な翼になるとテルの
背中にくっついた。

そして次の瞬間、テルはモンスターに目掛けて突進した。

背中の翼は光となってテルを覆い、テルと翼で一つの刃と化す。

紫の刃は一瞬でモンスターを貫き、爆発させた。

テルは剣を右腰のホルダーに仕舞う。

そして、キラとアキラを見つめた。

「終わったわよ」

テルは辺りを見渡し、やがてある場所へと歩き始めた。

立ち止まり、手を翳す。

すると空間がひび割れ、またあの穴が現れた。

「あ、待って。貴女達は・・・？」

「すまない。全部忘れてくれ」

そう言うとアキラはキラを抱え、穴の中へ放り投げた。

「キャッ！」

穴の中から飛び出し、キラは尻餅をつく。

辺りを見渡すが、さっきの変な世界ではない。

元の世界だ。

周りには誰もおらず、道端にはスーツケースがポツンと落ちている。

キラは呆然とその場に座り込んだ。

夜、キラは風呂でお湯に浸かりながらぼんやりと今日の出来事を思い返していた。

あれは現実だったのだろうか。

湯気が蔓延し、室内はキラの思考と同じくぼんやりと霧がかった。
る。

湯舟のお湯を両手で掬い、顔にバシャツと掛けた。

翌日の放課後。

キラは真っ直ぐ家に向かって下校していた。

昨日のこともあって、あまり道草を喰う気にならなかったのだ。

今でもあのサラリーマンの男の死の様は記憶に染み付いている。

あの時、どう動けばあの人を助けられたのだろうか。
どうすれば良かったのだろうか。

そして、昨日の少女達や球体は一体何者だったのだろうか。

そんなことを考えながら歩き続ける。

その時、キラの視界に一人の女性が映った。

・・・ただの勘違いだろうか。
いや、でも・・・

キラはその女性に声を掛けた。

「あの」

「ん？・・・君は昨日の」

そこまで言った所で女性はハッと口を抑える。

「しまった・・・これでは正体を明かしてる様なものだ」

キラが話し掛けた女性はアキラだった。

髪は赤ではなく薄茶色だ。

あの姿に変身した時だけ髪の色が変わるのだろうか。

「あの、昨日の事をもっと詳しく教えて下さい」

キラが頼むと女性は困った様な顔をした。
あまり話したくないのだろうか。

「・・・私は、君をあんな事には巻き込みたくはないんだが・・・
そうだな、あいつ等が余計な事吹き込んで困るな」

あいつ等とは白黒の球体のことだろうか。
アキラはキラを連れてどこかへと向かった。

「ここなら多少は落ち着けるだろう」

アキラが連れて来たのは町にある喫茶店だった。

各々の好きな物を注文し、それが持つてこられた時、アキラは本題
に入った。

「昨日のアレだが・・・あの姿はジュエラーという。モンスターと
戦っているんだが・・・どうして戦っているかは言えない」

それでは昨日得た情報と大して変わらない。
どうしようかキラが悩んでいると、アキラが話し掛けてきた。

「事情は話せないが、ここで巡り会ったのも何かの縁だ。自己紹介
でもしよう。私は一長アキラ、20歳」

「倉四季キラ、中学2年です」

「そうか、テルの奴と同年か」

「え？」

キラは昨日の少女を思い出して驚いた。

確かに身長は同じくらいだったが同年とは。

大人びた人だから年上だと思っていた。

「とにかく、あまり私達に関わらない方が・・・」

アキラは話の途中で立ち上がり、窓に向かって走り出した。キラも慌てて付いていく。

アキラは窓から下の通りを見下ろした。

しかし、そこには誰もいない。

「もう連れていかれた後か！」

アキラは喫茶店を飛び出して下の階に降りて行った。

キラは代金を払ってその後を追いつける。

キラが外に出ると、アキラは少し離れた場所に立っていた。

そして、ポケットから拳の紋章が刻まれたカードケースを取り出した。

すると、昨日と同じ異世界に繋がる穴が現れた。

アキラがカードケースを謎の空間に突き出すと、アキラの腰に銀色のベルトが現れた。

アキラは二発の蹴りを宙に繰り出し、大地に力強く足を降ろす。

「変身！」

アキラはカードケースをベルトに差し込む。

すると赤い光がアキラの体に集まり、アキラの姿が変わった。

赤い宝石を纏った拳の戦士、ガーネット。

「君は此処で大人しく待っていてくれ」

アキラはキックボクシングの様に軽くステップして穴の中に飛び込み、アキラが飛び込むと同時に穴は碎けて消えてしまった。

キラは大人しく待っていてしようとしたが、やはり昨日の事が忘れられずにいた。

自分が行っても足手まといにしかない。

それでも、昨日の様な死人を出すことだけは耐え切れなかった。

「困ってるみたいだなあ？」

突然背後から声がした。

キラは驚いて振り返った。

そこには昨日の黒い球体と白い球体がいた。

「・・・もし、力が欲しいなら僕等が君をジュエラーにしてあげるよ。ただし」

「おら、叶えたい願いを言いなあ？」

白い球体の言葉を遮り、黒い球体がキラに詰め寄る。

白い球体は不服そうな表情を浮かべた。

「ケセラン。正しい情報伝達をしないのは感心しないよ」

「パサランよお。楽しけりやいいだろお？」

ケセランと呼ばれた黒い球体は白い球体を突き飛ばした。

パサランは仕方ないといった顔をして静観に徹した。

「さあ、願いを言いなあ！それが契約だあ！」

ケセランはキラに強く言い寄った。

キラは考えた。

本当に自分は戦えるのか。
死ねば両親はどうなるのか・・・

色々な思いが頭の中を駆け巡るが、最後に頭をよぎったのは、蜘蛛に殺された男と何も出来なかった自分だった。

覚悟を決めてケセランを見る。

ケセランはニヤツと笑うとカードケースをキラに投げ渡した。

「さあ、ゲートの前に立ちな」

ゲートとは恐らく異世界に繋がる穴のことだろう。

キラは言われた通り、ケセランが開いたゲートに向かう。

「くっ！」

《アームキラ》

アキラの両手に大型のガーネットが装着され、モンスターを殴り飛ばす。その瞬間、アキラのいる場所が炎上し、アキラは爆風で吹き飛ばされる。

何とか起き上がり、アキラは敵を見る。

昨日の蜘蛛モンスターの生き残り。

そして、大きなモンスターが空中を舞っていた。

体中にダイヤモンドを生やした美しい輝きを放つドラゴン。

その体表は白い光沢を出しつつもうつすらと赤い輝きも放つ変化に富んだものとなっている。

ダイヤドラゴンが咆哮すると大地が震え、アキラの体も痺れて動けなくなる。

蜘蛛モンスターは頭の宝石を輝かせ、蜘蛛の糸の様な光を放つ。

蜘蛛の光はアキラを縛り付け、身動き取れなくなる。

そして、ダイヤドラゴンはアキラを仕留めるために向かっていく。

その時、ダイヤドラゴンの動きが止まり、どこか別の場所を見る。

アキラはダイヤドラゴンの視線の先を見詰める。

そこには、ゲートを隔てた先にこちらを見詰めるキラがいた。

どうして逃げずにいるのか、とアキラが叱る前にダイヤドラゴンが咆哮を挙げながらキラに襲い掛かる。

アキラは止めようとするが縛られている為動けない。

そしてダイヤドラゴンがキラに到達する直前

キラは紋章の刻まれていないカードケースを前に掲げた。

次の瞬間にはゲートを中心に強烈な閃光が放たれ、アキラと蜘蛛モンスターは直視出来ず、目を覆った。

そして暫くした後、光は収まった。

アキラは恐る恐る目を開いた。

そして、ゲートの先ではなく、自分達のいるこの異世界にキラは立っていた。

赤白く輝くブーツ。

ダイヤを彩った装甲服に頭に付けられた煌めくダイヤの結晶。

ダイヤドラゴンを従える戦士、ダイヤモンドがダイヤドラゴンと共にこの場に降臨した。

蜘蛛モンスターはキラに襲い掛かる。

キラはケースからカードを引くと、それを左手に装着されている竜頭型の装置に差し込む。

装置の口を閉めるとカードが読み込まれた。

《スラッシュキラ》

キラの手元にダイヤの宝石で出来た剣が現れた。

キラはそれを握り締め、蜘蛛モンスターを待ち構える。

アキラは自分を縛っている蜘蛛の糸を何とか引き裂こうとしていた。

その時、テルが物陰からこちらの様子を伺っているのが見えた。

「あいつ、一体何を・・・？」

テルの意図が読めず、アキラは困惑した。

「えいつ！」

キラが剣を振り下ろすと、蜘蛛モンスターの体から火花が散り、地面に転げた。

まだまだ様になっていない型だが、着実に蜘蛛モンスターを追い詰める。

途中、蜘蛛モンスターが頭から蜘蛛の糸のような光を放つが、キラはそれを切り裂く。

そして、再びカードを使う。

《アームキラ》

キラは剣を投げ捨て、拳で構える。

すると、ドラゴンの鱗の模様のダイヤで出来たナックルが現れ、キラの両手に装着される。

キラは何度か蜘蛛モンスターを殴り、アッパーで大きく殴り飛ばす。

そして、止めにカードを使う。

《ファイナルキラ》

キラの体が七色に輝き出し、祈る様に左手を右手で包んで目を閉じる。

すると、七色のキラの幻影が現れてキラの体が宙に浮く。

ダイヤドラゴンが宙に浮くキラの背後につき、激しく咆哮する。

そして、キラの幻影が本体に重なり、その度にキラの足のダイヤが大きくなる。

ダイヤドラゴンは口から輝くエネルギー波を発射し、それに包まれてキラは両足でキックを繰り返す。

蜘蛛モンスターは逃げようとするも間に合わず、キラのキックが炸裂した。

蜘蛛モンスターと地面が爆発し、煙がキラを包み込んだ。

やがて煙も晴れ、キラの姿があらわになった。

キラは縛られているアキラと気絶して倒れている子供を助けようとするも、途中でテルが近寄って来ているのに気付いて足を止めた。

「あの、えっと、「二宮さん?」

キラは何を言えば良いか分からず、しどろもどろになる。

テルは竜の紋章が刻まれたキラのカードケースを見詰めながら口を開いた。

「ダイヤモンド・・・か」

「私?・・・うん」

キラは自分の変身した姿のことだと思い、返事をした。

キラの戸惑いながらも真っ直ぐキラキラと見詰めて来る瞳を見ながら、テルは告げた。

「エサが目当てだったけど・・・ダイヤモンド、今潰しておいた方が良さそうね」

キラがその言葉の意味を理解する前に、テルの一闪がキラの体を切り付けた。

2話・契約、ダイヤモンド（後書き）

Q・何でアキラは変身の時キックやステップしたの？

A・本作品のリスペクト作である『仮面ライダー龍騎』はそれぞれのライダー事に変身前のポーズと変身後の仕草が違います。よって、本作もそれをパクリ・・・いえ、真似した結果です。

ダイヤモンド

デッキ構成

サモンキラー×1
ファイナルキラー×1
オフエンスキラー
ディフェンスキラー
スラッシュキラー
バーストキラー
アームキラー
フラッシュキラー×1

3話・戦士の理由

「きゃっ！」

キラはテルの刃に切り付けられると、のけ反って後ろに吹き飛んだ。

地面を転がるキラに、テルは続けて切り掛かる。

「ま、待って！どういづこと!?!」

キラは剣を足で弾くと、空中に蹴り上がってテルと距離を置いた。

そして、テルの真意を尋ねた。

どうしていきなり襲い掛かって来たのだろう。

テルはキラの発言に、怪訝な顔をした。

「……………もしかして、何も知らないの?」

「え?」

キラはテルに聞き返した。

「……………知らないなら、それでもいいわ」

《スラッ シュキラー》

テルは自分の剣に紫のエネルギーを纏わせる。

「えつと・・・」

キラはカードを引き、左手の竜に差し込む。

《ディフェンスキラ》

キラの周囲を光の竜巻が囲い込み、テルの斬撃を防ぐ。

「・・・」

テルは無言で次のカードを使う。

《サモンキラ》

空間が裂けると、そこからバードアメジストが現れ、竜巻に突撃した。

「うわっ！」

キラは突然の衝撃に驚き、地面に倒れた。すると、竜巻が消えてしまった。

テルは再びカードを使い剣を強化する。

《スラッシュキラ》

《アームキラ》

キラもカードを使い、ダイヤの武装を手に装着する。

襲い来る刃を受け止め、再度テルに問い詰める。

「教えて！どうしてこんなこと・・・」

「知らなくていい」

テルはキラを押し倒し、キラの上に乗る。

剣を逆手に持つと、頭上に振り上げた。

キラは迫り来る刃を眺めることしか出来なかった。

「そこまでだ」

テルの剣を、アキラが掴んで止める。

テルは舌打ちし、キラは安堵のため息を吐いた。

テルはキラの上から降り、アキラの手を振りほどいた。

「こんな何も知らない子を殺してどうする」

「ジュエラーは、そういう物よ」

テルは剣を鞘に納めると、そのままどこかへ立ち去ってしまった。

キラは、呆然と成り行きを眺めていた。

「悪かったな、助けるのが遅れてしまって」

アキラはキラに謝罪した。

テルが去ったあと、アキラはキラを家まで送り届け、その道中で事態の説明をしようとしていた。

「あの、二宮さんはどうして私を？」

キラが自分が襲われた理由を尋ねると、アキラは頷いて答えた。

「ケセランの奴は、願いを叶えてやると言っていたらどう？その願いを叶える方法というのが……他の全てのジュエラーを殺して、勝ち残ることだ」

キラは何を言われたのか、すぐには理解出来なかった。

やがて少しずつ理解していき、アキラに尋ねた。

「じゃあ・・・私、は」

「殺し合いに巻き込まれたんだよ」

アキラは静かに告げた。

ごまかしても仕方ない。そう考えていた。

「そんなの、私、全然・・・!!」

キラは震えた声で喋る。

「ああ、君が迂闊だったのもあるが、それ以上に奴らの手口が悪質だったんだ・・・君は悪くないよ」

アキラはキラを慰めるが、キラは俯いたまま動かなかった。

アキラはどうしたらいいか分からず、キラの背中をポンポンと優しく叩くことしか出来なかった。

翌日、キラは学校を出るとトボトボと家路についた。

いつもなら暖かい温もりをくれる太陽が今はジリジリと自分を焼いている気がした。

(ただ守りたいってだけじゃ駄目なのかな?)

キラはずっとジュエラーの事を考えていた。

キラにとって自分の為に誰かを殺すことは考えられないことだった。

それよりも、モンスターから人を守ることの方が余程大事だった。

「……皆の、叶えたい願って何だろう」

キラは物思いにふける。

アキラからもテルからも、一体何のためにジュエラーになったのか聞いていない。

「もっとアキラさんに話聞けば良かった……」

昨日の自分の態度を後悔する。

シヨックのあまり頭が回っていなかったのが悔やまれた。

「……まあ、悩んでも仕方ない!……よね?」

キラは考えるのを中断し、ひとまず家に帰ってしまおうとした。

そして、回り角を曲がろうとする。

その時、誰かとぶつかってカードケースを落としてしまった。

「あ、ごめんなさい」

キラは相手に頭を下げるとケースを拾い、相手も何かを拾っているのに気が付いた。

「どうやらキーホルダーのようだ。紫色のキラキラとした宝石が付いている。」

「綺麗だなー、とキラが眺めていると相手がキラに話し掛けた。

「ケースはこうやって何かに擬装した方がいいわよ」

「へ？」

「一体この人は何を言っているのだろう、とキラは相手の顔を見た。」

その顔には見覚えがあった。

特徴的な長い藍色の髪に、同性であっても思わず見とれてしまう整った顔。

「に、二宮さん？」

相手は昨日、一昨日と出会った少女、二宮テルだった。

キラはテルの服を見る。

当然昨日の様な鎧ではなく、学校の制服を着ている。

キラの記憶では、テルの着ている制服は日本でも指折りの優秀な私立校の物だった。

そんな立派な学校が同じ県にあるんだ、とクラスの友達と話していたのを思い出す。

テルはキラの横を通り過ぎ、去って行くこうとする。キラは慌てて呼び止める。

「ま、待って。どこに行くの？」

「家よ。悪い？」

テルはキラの腕を振りほどく。

キラはそういえばそうだったと思った。

テルの異能な所しか見ていなかった為、そういった普通なことが頭に浮かばなかった。

「じゃあ、もう失礼するわ」

テルはキラに背を向けて去って行く。

キラはその後を付いていく。

「付いて来ないで」

テルはそう言うが、キラは言う通りにはしなかった。

テルに聞きたいことが山ほどあるのだ。

テルは諦めたのか、何も言わず足を進める。

キラはその後を付いていく。

4話・ティール、ブレイク

「え……ここが二宮さんの家？」

キラは目の前にそびえ立つ屋敷に圧倒された。

どう考えても門と屋敷が離れすぎているし、あちこちに噴水や花が設置され、美しい庭が広がっている。

こんな豪邸にテルが住んでいるとは思っていなかったため、キラはその場に立ち尽くす。

テルはそんなキラを無視して敷地に入っていく。それに付いていこうと、キラも慌てて走り出す。

「……あれ？」

しかし、キラの目の前で門が閉まってしまい、キラは中に入れなかった。

キラは門を見つめ、そしてテルに視線を移す。

「……どうして、私が貴女を家に招かないといけないのかしら？」

テルはキラの視線をはねつけると、さっさと立ち去ってしまった。

置いていかれたキラは呆然としていたが、目の前の門が急に開いたので驚いて我にかえた。

振り返ると、キラの後ろにリモコンを持ったスーツ姿の老人がいた。この人物が門を開けたのだろうか。

「……………じいや」

テルは顔をしかめて老人を睨みつけた。どうやらこここの執事らしい。

「ほっほっほっ、いいではないですかお嬢様。ここまで連れてこられたということは、ご友人なのでしょう?」

執事はテルに尋ねる。

テルは舌打ちして顔を背けた。

キラは落ち着かない様子でソワソワとしていた。

やがて執事が二人の前に紅茶を差し出す。

白いテーブルの上にアクセントとして加わる。

「ありがとうございます」

キラがお礼を言うと、執事は頭を下げてその場から立ち去った。

二人の間に気まずい沈黙が流れる。

キラは思い切ってテルに尋ねた。

「あ、あの、テルの願いつて」

「教える気は無い」

テルに一刀両断され、言葉につまる。

キラは未練がましくテルを見つめながら、紅茶を飲む。

「……じ、じゃあ、何か手伝えることは」

「死んでくれる？」

テルにきっぱりと言われ、キラの目に涙が溜まる。
が、そこでキラは何か引掛かった。

「……本当に、そう思ってる？」

「当たり前でしょう、だから私は昨日貴女を……」

「じゃあ、何で昨日私を一撃で殺さなかったの？」

キラにそう言われると、テルは言葉に詰まった。

昨日、キラはテルにやられたが、そもそもおかしいことがあった。

最初の一撃。

あれでキラの心臓を突き刺すなり、目を潰すなり出来たはずなのに、キラの体に攻撃するだけだった。

「どうしてとどめを刺さなかったの」

「・・・貴女には関係無い」

キラにはテルが人の命を奪うことを躊躇っているように思えた。

「お願いだから、人を殺すなんてやめよう？モンスターを倒すだけでいいじゃない。そのためだけに戦えば・・・」

「そんなことするの、貴女だけよ。自分の得にならないことなんて、誰もしない」

テルはキラの提案をはねのける。

キラは尚も食い下がる。

「損とか得じゃない。人の命が掛かってるんだよ!？」

「こつちも命が掛かってる」

キラが問い掛けるとテルは即座に言い返した。

それは、テルの命が掛かっているということだろうか。

それとも・・・

キラが考えていると、テルは立ち上がってキラに背を向けた。

「……………今日は、帰りなさい」

「……………うん」

キラは、力無く頷いた。

テルの家を出て、キラは一人家路についていた。

夕焼けの光が全てをオレンジに照らし、キラの影がコントラストで目立って見えた。

「どうして、殺し合いなんかしなきゃいけないんだろう」

「それぞれ譲れない事情があるんだろうね」

キラの独り言に誰かが答えた。

キラは宙に視線を向けた。

フワフワと浮かぶ白い球体が視界に入る。

キラの元に現れたのは、パサランだった。

「何か用？」

キラはパサラン相手に身構えた。
キラをこの事態に巻き込んだ張本人だ。油断は出来ない。

「……そんなに身構えないでくれ。大体、僕らの責任なのは事実だけど、最終的にジュエラーになることを決めたのは君だろう?」

「ちゃんと話をしてくれたら私だってもっと考えたよ」

「話を聞こうが聞かなくても、君はジュエラーになったと思うよ」

パサランの物言いは気に入らないが、突っぱねてばかりでは話が進まない。

「それで、話って?」

「……ああ、君の様子が気になってね」

キラは首を傾げた。

アキラから聞いた話では、ケセランとパサランは司会進行のような物で、肩入れはしないはずだ、と。

パサランはキラに背を向けてどこかへとフワフワ飛んでいく。
そして、キラに一言だけ話し掛けた。

「……覚えてた方がいい。どんな目的で動こうと、ジュエラーは戦う運命だよ」

そして、パサランは遠くに去ってしまった。

その時、キラの頭に何かが響いた。
正しくは感じた、とでも言うべきか。

「モンスター・・・!?」

キラが感じたのはモンスターの気配だった。
ジュエラーになったことで、モンスターの気配に敏感になったよう
だ。

「とにかく、今すぐたたか・・・!?」

キラは強力な力と視線を感じ、バツと振り返った。

そこには、ゲート越しにこちらを睨むダイヤドラゴンがいた。
まるで戦え、と強要しているみたいだ。

耳をつんざくような咆哮が耳を通り抜ける。

「・・・もう、逃げられないんだね」

逃げたらダイヤドラゴンに殺される。そう直感した。

「私だって、やりたい事ぐらいある!」

キラはゲートに向けて右手にもったケースをかざした。

バックルがキラの腹部に現れる。そして、キラは左手を右側に突き上げた。

「変身！」

ケースをバックルに挿入し、キラの体に光が集まる。やがて、キラの姿が変化した。

先日と同じ、ジュエラーとしてのキラの姿。ダイヤモンドとなる。

キラは祈る様に両手を胸の前で重ね、ゆっくり目を開くと両腕を開いた。

腕の軌跡をなぞるようにキラキラと輝く粒子が宙を舞う。

キラはゲートの中に入り、別世界へ移動した。

シマウマの姿のモンスターがゆっくりと商店街に向かって歩んでいた。

二本の足でゆらゆらと進んでいく。

その前方に、キラがゲートを渡って現れた。

モンスターは戦闘に備えて構える。

キラはモンスターに接近して拳を振るった。

が、次の瞬間にはモンスターの体がバラバラに分裂してキラの拳が空を切る。

「え!？」

キラは慌てて振り返るが、モンスターの拳が顔面を捉え、キラの体は宙を舞う。

地面を転がりながらも、何とか立ち上がって体勢を整える。

バラバラになったモンスターのカケラが、キラの元へ飛んでいく。

キラの体に何回もぶつかり、キラは翻弄される。

足や頭のパーツが一斉に突撃し、キラの体は火花を散らしながら吹っ飛んだ。

キラはカードを引くと竜頭型のデバイスの口に装填する。

《バーストキラ》

キラの周囲に七つのダイヤが現れ、緑や紫など全部で虹色を描いていた。

キラが手をかざすとダイヤが飛んでゆき、モンスターに向かう。

モンスターのバラバラのカケラに何回もぶつかり、七つのダイヤはそれぞれダメージを与えていく。

七つのダイヤに囲い込まれ、バラバラになったモンスターはやがて一箇所に密集する。

《オフエンスキラー》

カードを読み込むと、キラの右手にダイヤドラゴンの頭が出現する。

「はあああああ．．．やあっ！」

キラが右手を前に突き出すと、ドラゴンの頭から直径がキラの身長程の巨大なダイヤが発射された。

ダイヤは散らばって避けようとしたモンスターのカケラを全部巻き込み、爆発が起こる。

モンスターはその衝撃で元に戻ってしまった。

キラは続けてダイヤを操作し、七つのダイヤが同時にモンスターの胸へ襲い掛かる。

モンスターは避けれずに直撃し、大きく吹き飛んだ。

トドメのチャンスだと悟ったキラは、カードを引き抜いて装填する。

《ファイナルキラー》

キラが祈る様に両手を重ねると七色の幻影が現れ、キラの体が宙に浮き上がる。

ダイヤドラゴンが現れるとキラの背後に追従し、口から光り輝くエネルギーを発射する。

キラの幻影もキラに集まり、キラの足裏に巨大なダイヤが現れる。

キラはダイヤドラゴンの放ったエネルギーに包まれ、足にあるダイヤを輝かせながらモンスターに突っ込む。

「ッダアアアアアアアアア！」

モンスターに避ける暇は無く、キラのドラゴンダイヤキックが直撃し、モンスターは爆散した。

モンスターのいた所から光の球体が現れ、ダイヤドラゴンはそれを喰らうとどこかへ去って行った。

「あれは・・・？」

「モンスターの命だよ」

突然の声に驚き、キラは慌てて振り返る。
すると、そこにはアキラがいた。

「ああやってモンスターの命を自分の契約したモンスターに与える・

・・・それが、ジュエラーとモンスターの契約だ」

アキラはキラの前に立ち、尋ねた。

「もう決めたのか？自分がどうするのか」

「私は・・・」

キラは少し躊躇ったが、アキラの目を見て答えた。

「私は・・・ジュエラーを殺さない。モンスターを倒す為に戦います」

「・・・辛いぞ。その選択は」

「それでもです」

キラの真っ直ぐな眼差しを見て、アキラは思わず微笑んだ。

「頑張れよ」

「はい！」

キラは力強く頷き、答えた。

5話：新しい風

「マリコ、トモコ、空いてる席あった？」

キラは隣の友人達にひそひそ声で話し掛けた。

今日は図書館で勉強しよう友達と一緒に来たのだ。
日曜の昼過ぎだからか、席はどこも一杯だった。

「どこかないかなー」

「キラ、あそこ三つ空いてるよ」

マリコがとある席を指差す。
確かに三つの席が空いている。

「じゃあ、あそこにしよう」

キラ達は席に座って本を開き始めた。

キラは席に座った途端、誰かが隣に座っているのに気付いた。

（まあ、殆ど満席だし当然だよな）

そう思ったのだが、目線を下ろすと視界の隅で揺れる長髪がちらついていた。

どこかで見た藍色の髪だ。

「……え？」

「……？」

隣の人と目が合った。

そこにいたのは……

「に、二宮さん!？」

キラは思わず声をあげて立ち上がった。

ガタツと椅子は音を立て、隣にいたマリコとトモコは驚いた。

周りの視線がキラに集まる。

テルはキョトンとしていたが、相手がキラと分かると目を逸らし、荷物を纏めて足早に去って行った。

「あ、待って!二宮さん!！」

キラも慌ててその場を去って行った。

「おーい、荷物ー」

トモコは荷物を置いて去って行ったキラに呼び掛けたが、キラはもう去ってしまっていた。

「待って、二宮さん！」

図書館の入口付近でキラはテルを呼び止めた。
テルはいらつきながら振り向いた。

「何？」

「いや、あの……」

キラは言葉に詰まった。

そもそも何故テルを追い掛けたのか自分でも分かっていなかった。

「い、いい天気だね！」

「……」

テルは無言でキラの隣を通り過ぎる。

キラは咄嗟にテルの腕を掴んで引き止めた。

「私……やっぱりジュエラーとは戦わない。モンスターを倒すために戦う」

「なら、私は容赦はしない。今すぐにも貴女を殺す」

そう言ってカードデッキを手に取るが、キラは動かない。

テルは不審に思っただけ動きを止めた。

「私、二宮さんが人を殺せるとは思えない」

テルはキラの急な発言に面を喰らう。
キラは続けて話し続ける。

「なんだか、二宮さんは無理して殺すって脅してるみたいで」

「知った風なこと言わないで！」

テルが大声で割り込んだため、キラはビクツと体を震わせる。

テルはキラから視線を逸らしたまま何か呟く。

「私は殺さないといけないの・・・」

「私は、貴女と戦いたくないよ」

テルはキラを睨みつけ、二人は長い間見つめ合う。

やがて、テルはそこを去ってしまい、キラは一人ぼつんと佇んだ。

キラは河川敷を歩いていった。
もう勉強に集中出来る気がしなかったため、二人に断りを入れて帰ることにした。

「二宮さん……」

思い返しても頭に浮かんでくるのはテルのことだった。
どうにかして彼女と戦わないようにすることは出来ないだろうか。

「何とかならないかなあ」

そう呟いた瞬間、

「えっえっえっ!?!」

足を踏み外し、斜面になだれ込む。

が、転倒する前に誰かの背中にぶつかって、転がらずに済む。

「……おい」

誰かの声が聞こえる。

ぶつかってしまった人だろう。

キラは急いで立ち上がり、相手を見た。

キラの視界に、パレットが張り付いた悲惨な絵が映り込む。

「う、ごめんなさい！」

キラは何度も何度も頭を下げる。
相手が深いため息を吐いたので、キラは相手の様子を伺った。

男はライトグリーンの短髪を掻きむしり、やがて口を開いた。

「・・・反省してるならいい。どの道失敗作だったからな」

「え、そうなんですか？」

キラは意外に思った。

かなり上手に出来ていると思うのだが、どうやら男は気に食わなかったらしい。

その時、キラの頭にキーンと高い音が響いた。

「・・・モンスター！」

キラはモンスターの出現を察知し、その場から立ち去った。

男は暫く動かずにいたが、やがて踏み出し始めた。

キラはある程度走った後にゲートを見つけ、カードデッキを突き出した。

ポーズを決め、デツキをバツクルに差し込む。

「変身！」

キラはダイヤモンドに変身し、ゲートを通り抜けた。

辺りを見渡すと、蟹のような人型のモンスターが屋根の上に潜んでいた。

モンスターはキラに気がつくど、キラに飛び掛かって来た。

キラはバックステップで回避し、カードを引いた。

《アームキラ》

キラの両手に武装が装備され、モンスターを殴りつける。

吹っ飛んだモンスターはすぐさま起き上がり、キラに向けて泡を発射する。

キラはカードを引いてセットする。

《ディフェンスキラ》

キラの周囲を光の竜巻が囲み、泡を防ぐ。

《オフエンスキラ》

電子音声が響いたかと思うと、竜巻の中から巨大なダイヤが飛び出しときた。

モンスターは避けようとしたが間に合わず、ダイヤを背中に受けて吹っ飛ぶ。

竜巻は納まり、中から右手に竜頭を装備したキラが現れる。

キラはモンスターに接近し、右手のドラゴンヘッドで殴り飛ばす。

モンスターはまたまた耐え切れず、大きく吹き飛んだ。

その時、キラの視界に何かか写り込んだ。

どうやらゲートが出現しているようだ。

そして、ゲートの向こうには先程の男が立っていた。

「あの人、どうして・・・」

キラは何故あの男がゲートの前に立っているのか分からなかった。

うろたえた様子が無い所から、この世界に関する知識があるようだ。

「もしかして・・・」

「アイツは、五階堂フウヤしつかいどう」

キラが振り向くと、そこにはアキラが変身した姿で立っていた。アキラは彼のことを知っているようだ。

フウヤはデッキをゲートにかざし、竜巻の様な軌道で腕を引き、構える。

「変身！」

デッキをバツクルに差し込み、姿を変える。

全身を纏う装甲は緑色の輝きを放ち、肩や頭には竜巻型の飾りが付けられている。

変身が終わると、両腕を上から下へ振るう。すると、淡い緑色のムチが現れる。

フウヤはゲートをくぐり、こちらの世界に入ってくる。

フウヤの視線がキラとアキラに向けられる。

「そして、ジュエラーとしての名は……エメラルド」

アキラの説明を聞き、キラは再度フウヤを見つめた。

フウヤはモンスターとこちらを交互に見る。

その瞬間、アキラはいきなり飛び出し、フウヤに特攻する。

「アキラさん!？」

「五階堂、覚悟！」

フウヤはムチを振るい、アキラと戦い始めた。

キラが戸惑っていると、後ろから誰かが声を掛けてきた。

「驚かなくていいでしょう。ジユエラーって、ああいうものよ」

「二宮さん……」

キラが振り返るとそこにはテルがいた。

もっと話そうとしたが、モンスターが突撃してきたためキラは体を押されていく。

テルはカードを引き、剣に挿入する。

《ファイナルキラ》

「えっ!？」

キラがモンスターを蹴っ飛ばすと同時に、テルが必殺技を発動する。

そして、紫の刃は一直線に進み、モンスターを貫いて爆散させる。

しかしテルの技は止まらず、キラに向かって真っ直ぐ向かって来る。
キラはこれは事故ではなく、テルがモンスターと一緒に自分も倒そ
うとしていることを悟った。

キラの目に、迫り来る紫の光が焼き付いた。

6話・同盟結成？

「あ、え………」

キラは目の前に迫り来る紫の光に気圧され、避けても間に合わないことを察した。

それでも、反射的にカードを引きバイザーにセットした。

《フラツシュキラ》

キラの左手にあるバイザーから強烈な光が放たれ、周囲を照らす。

するとテルの技が消え、テルはその場に着地した。

「……無効化？」

テルは思わず呟いた。

「どうやら先ほどの技は攻撃を消す力らしい。」

「ち、ちょっと。危ないじゃない！」

キラはテルに詰め寄るが、テルは相手にしない。

それでも詰め寄るキラにウンザリしたのか、テルはキラを突き飛ばした。

「いい加減にして、ジュエラーは殺し合うんだから当然でしょう」

「そんなの、納得出来ないよ！」

キラは強く反発した。

どんな理由があっても、人を殺していいはずがない。

キラはそう思っている。

テルはため息をつくとき、ある場所を指差した。

「そんなに戦いを止めたいなら、先に向こうをどうにかしなさいよ」

キラはテルの指差した方を見た。

ここでは、アキラとフウヤが未だに戦い続けていた。

キラは慌てて二人の元へ走って行った。

《ナツクルキラ》

《エレメントキラ》

アキラの拳にガーネットで出来たメリケンが装着され、フウヤの鞭には風が付加される。

互いの攻撃がぶつかり合い、火花を激しく散らす。

「うおおおおおー！」

「ハアツ！」

二人は力を込めて攻撃を開始する。

「やめて！」

《ディフェンスキラ》

キラの両腕にダイヤドラゴンから出来たシールドが装着される。
キラは二人の間に立ち、アキラの拳とフウヤの鞭を受け止めた。

「倉四季！？」

「ん？」

二人は突然の乱入者に驚いたが、キラの姿を見ると武装を解除した。

「やめてください。どうしたんですか、アキラさんまで」

「・・・だが、コイツは」

アキラはそこまで言いかけた所で上を向いた。
キラもつられて上を向く。

ダイヤドラゴンがモンスターの命である光の球体を飲み込み、どこかへ去ってしまった。

テルはキラをジト目で見詰めた。

「貴女……」

綺麗事を言っておきながら、狙いはこれか。と言いたげな眼差しだった。

「ち、違う。ダイヤドラゴンが勝手に！」

キラは必死に否定した。

これではモンスターをダイヤドラゴンに食わせる為に場を掻き乱したみたいだ。

「……変な奴がジュエラーになったもんだ」

フウヤは鞭をしまつと背を向けてこの場を去ろうとする。

「逃げる気か!?!」

アキラの問いにフウヤが答える。

「今日はそんな気分じゃないんだ」

フウヤの発言を聞いてアキラは殴り掛かろうとしたが、キラが引き止める。

「アキラさん、落ち着いて!」

そうしている内に、フウヤはゲートを潜って元の世界へ返った。

その後、キラ達もジュエルワールドから元の世界へ帰還した。

元の世界へ帰るやいなや、テルは立ち去ってしまった。

キラはアキラに尋ねた。

「アキラさん、フウヤさんと何があったんですか？らしくなかったですよ」

さっきのアキラは、今までとは明らかに様子が違った。

アキラは答えづらそうにしていたが、やがて口を開いた。

「あいつは……アイツに、私の弟は」

「人聞きの悪い嘘を振り撒かないでくれないか」

アキラが話し出すと、どこからともなくフウヤが現れた。

アキラはフウヤを睨みつける。

「何が嘘だ。お前が見殺しにしたのは事実だろう!!」

「ちょ、ちょっと。落ち着いて下さい」

キラはアキラを何とか押し止めると、フウヤに事の真偽を尋ねた。

「あの、見殺しって一体・・・」

フウヤはため息をつくと、事情を話し始めた。

「十年前に大規模の台風が俺達の町を襲ってな・・・こいつの弟は、その時増水してた川に巻き込まれたんだよ」

「今でも鮮明に覚えてるよ。橋から落ちた弟・・・そして、流される弟を間近で見て置きながら助けようともしなかったコイツを
「!」

「無茶言つな。ガキの頃の俺にあんな危険な川に飛び込めつてのが無理なんだよ」

「何だと!？」

再びアキラが飛び出そうとしたので、キラは何とか抑える。

「・・・俺は災害で誰も死なない世界にする。そのためにジユエラーになった」

「災害で、誰も死なない?」

キラはフウヤに聞き返した。

「俺の両親は地震で発生した土砂崩れに吞まれて死んだ。だから・
・もう、災害で誰かが死なない世界にする」

「人を見殺しにするお前に出来るはずがない。それは私が願う！」

アキラを無視し、フウヤはその場を去って行った。

キラは何とかアキラを宥め、話し掛けた。

「アキラさん……私には、貴女の言い分が言い掛かりに聞こえます。別にフウヤさんが弟さんを殺したわけじゃ……」

「自分でも分かってるさ。だが……あいつの顔を見ると、どうしても冷静じゃいられなくなる。どうしても感情的になってしま
うんだ」

アキラはうなだれて、その場に座り込んだ。

キラは心配でアキラを覗き込む。

アキラはキラの頭を撫でた。

「ありがとう。余計な心配を掛けさせたな」

「いえ、気にしないで下さい」

「そういえば……二宮と何があった？何か言い合っていたようだが」

キラは言葉に詰まった。

出来ることなら、テルとのことにはあまり触れて欲しくなかった。

「二宮さんが、どうしてもジュエラーを殺すって……何度話しても、分かってくれなくて」

「仕方ないさ。私には分からないが……あいつにも、譲れない事情があるんだろう」

譲れない事情。

テルが人を殺してまで、叶えたい願いとは何なのだろうか。

その夜、テルは家のバルコニーで夜空を眺めていた。少し肌寒いが、星の輝きはそれを忘れさせてくれる。

テルは自分の傍に何かが来たのを感じた。

「何か用？」

パサランが手摺りに着地し、テルに話し掛けた。

「倉四季キラはどっだい？」

「・・・別に」

「そうかい」

テルにはパサランの意図が分からなかった。

「一体何のつもり？こんな夜にあの子の話をするためだけに来たの？」

「そうだね、ただちょっとね」

パサランは宙に浮き、テルの前に移動した。

「倉四季キラはやがて君にとって最大の壁になるだろう」

「あんな、戦う気のない子が？冗談が下手ね」

テルはパサランの言葉を一蹴した。

しかし、パサランは少しも気にせず続ける。

「ああ、彼女の性格からしてね。僕の話はそれだけさ」

テルは顔をしかめた。

あの見るからに甘ったれてそうな子に苦しめられるというパサランの言葉が不愉快だった。

テルはバルコニーから自室に戻り、開き戸をボタンと閉めた。

一人になったパサランは独り言を言い始めた。

「もつとも、その壁が君の前にあるのか後ろにあるのかはまだ分からないけどね」

翌日、キラは学校を終えて帰る途中だった。
いつも通りに歩いて行く。

そこで、またテルに出くわした。

「二宮、さん……」

キラの顔を見て、テルは昨夜のことを思い出した。
そしてキラに問い詰めた。

「戦う気がないならどうして貴女はデツキを捨てないの。貴女が生きているだけで他のジュエラーの願いの足枷になるだけよ」

「これは……モンスターを倒すのに必要だから」

それを聞いて、テルはキラの胸倉を掴む。

「だから、貴女はモンスターにエサを与えて強くなる必要ないですよ！」

「強くなりたいんじゃない！」

キラが声を荒げて叫ぶと、テルは思わずたじろぐ。

「私はただ、モンスターから人を守りたいだけ。これ以上、誰かが死ぬのは嫌なの！」

キラは思わずテルの両手を掴んだ。

「だからお願い。私と一緒にモンスターを倒して！貴女だって、モンスターを倒したいでしょう!？」

テルは思わずキラの話聞いていたが、我に返ってキラの手を振りほどいた。

「確かにそうだけど、貴女と組むメリットがない。貴女が私を裏切る可能性も」

「テル!!」

テルは何が起こったか分からなかった。

キラはテルの名前を呼び、その目を見詰めながら話し続けた。

「私は、テルを裏切らない」

二人は何も喋らない。

ただ、互いを見つめ合うだけだ。

その時、キラとテルの頭にキーンと高い音が響いた。

モンスターが現れた証だ。

キラはカードケースを前に出す。

するとキラの前にゲートが現れた。

「変身！」

キラはダイヤモンドに変身し、ゲートを潜った。

テルは、そんなキラを黙って見送った。

キラはジュエルワールドに入ると、辺りを見渡した。

すると、電柱の上にモンスターが立っていた。

赤と青、二体の亀の甲羅を背負った人型の亀モンスターがそれぞれいた。

モンスターはキラの元へ飛び降りる。

キラはモンスターを回避し、カードを引く。
そして、バイザーにセットする。

《アームキラ》

キラの両腕にダイヤの装甲が装着され、モンスターを殴る。

が、モンスターの両腕には亀の甲羅のような物があり、ダメージを与えられない。

「っ、固ア!？」

キラは痺れた右手を振る。

その隙にもう一体のモンスターがキラを殴り飛ばす。

テルはキラとモンスターの戦闘をゲート越しに眺めていた。

2対1なためか、キラが押されているようだった。

テルがゲートの先を眺めていると、アキラがやって来た。

「やっぱり、変わった奴だろう?」

「…………ええ」

アキラもゲートの先で戦うキラを眺める。

「あいつは自分の為じゃなく、どこかの他人のために戦える」

「他にやり方もあるでしょうに」

テルは呆れながら、ケースを取り出す。

「あいつと手を組むのか？」

「知らないわよ」

テルがケースを出すとバックルが出現する。

「変身！」

テルはアメジストに変身し、ゲートを潜った。

ジュエルワールドに入ると、カードを剣にセットした。

《スラッシュキラ》

テルが剣を振るうと紫の刃が飛び、モンスターの横腹に当たり、モ

ンスターは怯んだ。

キラはカードをセットする。

《オフエンスキラ》

キラの右手にダイヤドラゴンの頭が装着され、キラは右手を突き出した。

すると、ドラゴンヘッドから巨大なダイヤが発射される。

二体のモンスターはダイヤに直撃して吹っ飛んだ。

キラは傍にやって来たテルを見た。

そして、テルはキラに告げた。

「モンスターの時だけ」

「え？」

「モンスターと戦う時だけ、貴女と共闘してあげる。それ以外は……ジュエラーとの戦いの時は、容赦しない」

テルの言ったことを理解し、キラは微笑んだ。

「じゃあ、私は絶対に死ねないね。貴女と……ジュエラーを戦わせないために」

「……出来るのならやってみなさいよ。キラ」

キラは自分の耳を疑った。

「……え？」

「貴女が先に私の名前、言ったのよ」

キラはそういえばそうだった。と思い出した。

つい勢いに任せてしまった。

キラとテルはモンスター相手に身構えると、向かっていった。

キラが青いモンスター。テルが赤いモンスターと戦う。

キラはドラゴンヘッドを叩き付けるように振るう。

モンスターは両手でガードするが、何度も同じ場所を叩かれたため、耐え切れず装甲が崩れる。

キラはモンスターを蹴飛ばし、カードをセットした。

《オフエンスキラー》

ダイヤドラゴンがキラの後ろに現れる。

キラはドラゴンヘッドを突き出し、それに合わせてダイヤドラゴン

が口から虹色のビームを放つ。

モンスターはビームに直撃し、思いつ切り吹き飛ばす。

《マツハキラー》

テルは高速で移動し、モンスターを攪乱する。

どうじに、首や脇腹など装甲のない部分を正確に斬っていく。

《スラツシュキラー》

テルの剣に紫色のオーラが纏われ、テルはモンスターを一閃する。

モンスターは勢い良く転がっていく。

キラとテルは同時にカードを引き、セットする。

《ファイナルキラー》

《ファイナルキラー》

キラは宙に浮き、テルは紫のオーラを剣に集める。

そして、それぞれの必殺技を同時に繰り出した。

「っダアアアアア！」

ドラゴンダイヤキックが青いモンスターに炸裂する。

そして、テルの必殺技も、赤いモンスターを捉え、貫いた。

燃え盛る爆煙の中、キラとテルは互いを見つめ合った。

その頭上で、ダイヤドラゴンとバードアメジストがモンスターの命を喰らい、咆哮をあげる。

「グオオオオオオオ！」

「カアアアアアア！」

二つ声が響き渡る中、二人の戦士が炎の中で立っていた。

「……………で、何？」

テルは不機嫌そうにキラに聞いた。

戦闘が終わったあと、強引に連れて来られたため、怒っている。

「そんな気にしないで、ほら食べて！」

そう言っておでんの皿をテルの前に差し出す。

まだおでんには少し早いだろうに。

テルはハフハフしながら大根を食べるキラを見ながら、同じく大根を口にした。

なんだか、とてもあったかい気がした。

6話：同盟結成？（後書き）

二宮テル CV・早見沙織

アメジスト

デッキ構成

スラツシユキラー

マツハキラー×1

イリユージョンキラー×1

デイフェンスキラー

オフエンスキラー×2

サモンキラー×1

ファイナルキラー×1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335w/>

ミラクル ダイヤモンド

2011年12月25日01時53分発行